

翳り、そしてコロナの
花卉

かげのね

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本間ひまわりが美しいだけの文学

第1話

目次

1

第1話

あなただけを見つめていました。

初めてあなたに逢ったのは四月の半ばの事でした。いや、「逢った」と云うのは些か凶々しい表現でしょうか。僕はあなたと目が合った訳でも、会話をした訳でも無いのですから。生温い空気に乗った桜吹雪の鬱陶しかったのをよく覚えています。当時高校に入ったばかりの僕は慣れない環境に慣れない電車を使つて足掻くように通つていました。

苦勞して合格を掴んだ筈の進学校での生活に虚無感を覚えるばかりだった或る日、夕方の駅のホームであなたを認めました。僕が帰りの電車を待つホームの向かい、つまり僕が朝登校する為に降りるホームに制服を着たあなたは立っていました。

心地好く揺れる明るい茶髪に、翠玉の如く輝く瞳、本当に咲いているかのような大きな向日葵の髪留め。僕は眼が離せなくなりました。スマートフォンを両手で弄りながら物憂げな表情で少しだけ俯いているあなたは大変芸術的で、それは翳の中に確かな美しさを感じてしまうベアトリーチェ・チェンチの肖像を思わせました。

見知らぬ制服のあなたに我を忘れて釘付けになっていた僕の背後で、突然

「ひまーっ」

と叫ぶ大声が響きました。頬杖を付きながら見ていた夢から覚めたように、或は莫迦な魚のように全身を弾ませ、僕は袈裟に驚いてしまったのを記憶しています。

その声に反応したあなたはバツと顔を上げ大きな瞳でこちらを見た刹那、袈裟に手を振りながら破顔しましたね。その笑顔が暴力的なまでに華やかで輝々としていて、アルフォンス・ミュシャの絵画の美女たちに劣らぬ絢爛さを覚えました。先程の月の呪いのような魅力とは対照的な、光線レイを放つ橙色の太陽の如き笑みを直視する事を恐れ、僕は地面から伸びた糸に顔を引っ張られたかのように咄嗟に下を向いてしまいました。

嘲笑のような警笛にフツと現実へと引き戻されました。いつの間にか黄色い点字ブロックの半歩先に立ってしまっていました。慌てて後ろに一步下がった後乗った帰りの電車の中では、始終月の瞳と太陽の笑みが僕を煩悶させました。一人の人間の中にあんな残酷なまでに対極の魅力が共存している事なんてあり得るのでしょうか。太陰と太陽とが表裏一体のあなたの惑星は、僕を恐るべき重力で引き付けて仕様が無いのでした。

家に帰る前に、噛みきれなかった感情を喉の奥に流し込む為に自動販売機で百六十円のストレート・ティーを買って飲みました。どうにも好きではなかったあの独特の苦い後味が、この日ばかりは愛おしくて堪らなかったのです。

* * *

あなたと再会したのは三ヶ月が経った暑い日でした。夏らしい開き直ったような猛暑が訪れる前の、曇った空の陰鬱さに乗じて半端な熱気がひどく不快な七月。少しばかり温くなった紅茶の後味からはやはりあの時ほどの快感は得られませんでしたが、それでもペットボトルをゆっくりと流れる水滴を見ると僕は陽が出るのを待ち遠しく思うのでした。

何年も、何十年も待つていたような、随分懐かしいように感じるあなたの顔は、常にあの太陽の笑顔に彩られていました。見慣れたスマートフォン画面にあなたが映っているだけで大変に新鮮で、僕は小さい液晶にあなたを閉じ込めて独占した気分でした。加えて、あの日感じたあなたの月光のような情緒は、あなたを見てる何千、何万人の中でただ一人僕だけが知っている気すら覚えて、僕は勝手に優越感に浸るのでした。冬眠をする熊が冬を知らないように、実際に見ていなければ太陽の裏側は月面で覆われていたことなど誰もわからないのです。僕は誇らしい心持でした。

同時に、悔しさが心の底の底から這い出てきたのです。どうしてあの時、タッタ一瞬でも眼を合わせておかなかったのだろう。今更画面越しにどれだけ視線が交わったところで、あなたの二つの翠玉は僕だけのものにはならないのでした。間違いなく、人生で一番の後悔でした。どうかもう一度逢いたい！ もう一度逢えたなら、僕は灼熱の笑

顔で焼け焦げてしまおうと構わない！ ああ、どうしてあの時、タツタ一瞬でも眼を合わせておかなかつたのだろう——。

* * *

それからは、毎日電子の太陽を拝みながら駅のホームであなたを探すようになりました。休日も毎週欠かさず、あの日の時刻になるとあなたのいたホームを血眼になつて探してしまふのでした。しかし季節が巡りつくに向日葵は萎れ、僕の焦りが顕現したような木々の紅潮すら引いて雪の降る頃になつても、あなたは現れませんでした。毎日あなたは確かに生きていますはずなのに、どうしても見当たらない。僕は脆弱な精神をほとんど絶望に蝕まれていましたが、それでもあの日の記憶が煌々と輝いている限り僕は希望を捨てきれず、半ば取り憑かれたようにあなたを探すのでした。

ちょうど一年が経ちました。死んだように、機械的に学校に通っていた僕は、その日の朝電車を降りた後、なんとなく反対側のホームを振り返りました。帰り際に逆のホームにいたということは、朝ならばあなたはそちらにいるのではないか、とふと思ったのです。

向かいのホームに來た電車の窓を見ると、探し求めていた顔が奥に見えた気がしました。心臓が握りつぶされたような高揚感でした。喧しい朝の満員電車が発車するのを一日千秋の思いで待ちました。

あなたはいました。僕が一年もの間追い求めていた輝く茶髪を春風で靡かせ、ああなたと改札へ向かうべく階段を上り始めてしまいました。僕は待つて、と叫びました。鼓膜を錐で傷つけられたような痛みを覚えるほどの大声とともに思考を介さず走り出し、そのまま空へと飛び出してしまいました。背後からキヤアア、という声が聞こえた気がしました。向かいのホームの人間が一齐にこちらを向きます。有象無象の顔ぶれの中、あなたもこちらを向いてくれましたね。僕だけが知っているあの表情で、陽の光に照らされたような翠玉の瞳と、僕はようやく視線を交えることができたのです。少し困ったような、悲しいような、驚いたような、そんな眼をしていました。

スロー・モーシヨンのように体がゆっくりと線路へ落ちていく中で、僕は幸福に包まれていました。温い春の空気を劈くような五月蠅い警笛も、この瞬間だけは祝福の鐘に聞こえたのです。

あなただけを見つめていました——。